



心にだけ
流れる音楽

鈴野しずね

11月のある日、国立新美術館の「ゴッホ展」へ行ってきた。

たくさんの絵を見ながら、いろいろなことを感じた。

ゴッホの絵の勉強方法や、1枚の絵を描くための習作の数々に、ゴッホの思考回路を想像してみたり。

たとえば「じゃがいもを食べる人々」の人達それぞれに、ゴッホは頭の中にストーリーのようなものを思い浮かべたかもしれない、習作を描きながら。

それは「わかってはいても、きょうも食べ物は芋しかない」そんな小さな呟きかもしれないし、「きょうの労働はひときわ辛かった」というものかもしれない。

「防水帽を被ったあごひげの漁師」の解説には、「この防水帽を手に入れたゴッホの喜びはとても大きかった」という内容が書かれている。

その帽子を被るにいちばん相応しい人の、がっしりした顔の骨格、皺、表情などが、とても丁寧に丹念に描かれている。

ゴッホはこれを描きながら、きつとこの漁師の性格や人生にも思いを巡らせ、それらをこの絵に表現したのではないか、そんなふうにした。

「ガシェ博士の肖像」（エッチング）

パイプをくわえたガシェ博士は、誰かと話しているように見える。

きつとゴッホと、人生や芸術などの議論でも交わしているのだろう。

「それはねえ君、違うよ、つまりだな～」と身を乗り出しながら言ったそんな言葉が、ちょっとしゃがれた声色で聞えてくるような気がした。

このゴッホ展にはたくさんの作品が出品されていて、またアルルの寝室が実際に再現されたりCGがあつたりと、いろいろな試みもされているのだけど、ある作品の印象が強烈であり覚えていない、というか感想が今は霞んでいる。

その絵は「マルメロ、レモン、梨、葡萄」

柔らかく優しい金色に輝くその絵の前で、私は動けなくなってしまった。

それはまるで朝の瑞々しい日差しのもあり、夜のランプの穏やかな光のもあり。

じつと見ていると、絵から繊細な旋律が聴こえてくるような気がした。

心が震えた。

胸がいっぱいになって涙が出そうになるのを必死でこらえた。

なぜ自分がそんなふうになるのかわからなかった。

その繊細な旋律に、心の弦が共鳴し始めたのだろうか？

その絵は、ただひたすらに美しかった。

ここに描かれているフルーツは、本来の色とは違うだろう。

でもそれを描く一筆一筆が、その色とリズムが、フルーツの瑞々しさと香りまでも私に連想させた。

その金色と、ところどころの赤などのわずかな差し色が、クリスタルのような透明な響きを感じさせた。

背景に目をやると、その一筆一筆にはポップな音色が踊っているような気がした。

ああ、どうしよう、、、。

この絵の美しさに惹き込まれ、そして無意識に連想してしまう音色を楽しみながらも、やっぱり私は戸惑っていた。

こんな自分の感覚におののいていた。

「音楽が聴こえる気がする」なんて人には言えない、、、。

再びこの絵全体に目を向けると、それはまるで金管楽器の音色。

ゴッホ自作の額縁は、その音楽の全てを司る指揮者のようだった。

クレイジーな妄想、マイノリティな共感覚。。。。

私が音楽に映像っぽいものを感じるっていうことは、その逆もまた有りってということだったのかあ。

今になってやっと気がついた。

相変わらずよくわかんないヤツだな、私って。←自分で言うな。

心にだけ流れる音楽

<http://p.booklog.jp/book/19558>

著者：鈴野しずね

著者プロフィール：<http://p.booklog.jp/users/shizushizu/profile>

感想はこちらのコメントへ

<http://p.booklog.jp/book/19558>

ブックログのpapier本棚へ入れる

<http://booklog.jp/puboo/book/19558>

電子書籍プラットフォーム：ブックログのpapier（<http://p.booklog.jp/>）

運営会社：株式会社paperboy&co.